

ば、なほ封誤^{ふくご}たず、開き見ればただし錢四貫のみ無し。爰に六宗の学頭の僧等集會り怪びて、女人を問ひて曰はく「汝何行をかする」といふ。答へて曰はく「する所無し。ただし貧窮に依りて、命を存つに便無く、帰無く、怙^こ無し。故に我れ是の寺の釈迦丈六仏に花と香と燈とを献りて福の分を願ふのみ」といふ。衆の僧聞きて商量りて言はく「是れ仏の賜へる錢なり。故に我れ藏めず」といふ。返りて女人に賜ふ。女錢四貫を得て増上縁とし、大に富みて財饒にして身を保ち命を存つ。諒に知る、釈迦丈六の不思議の力と女人の至信とを。奇しき表の事なり。

行基大徳天眼を放ち女人の頭に猪の油を塗れるを視て

呵嘖む縁 第二十九

故京の元興寺の村に、法会を嚴備け、行基大徳を請へ奉りて七日法を説かしむ。是に道俗みな集りて法を聞く。聴く衆の中に、一の女人有り。髪に猪の油を塗り、中に居て法を聞く。大徳見て嘖みて言はく「我れはなほだ臭きかな。彼の頭に血を蒙れり。女を遠く引き棄てよ」とのたまふ。女大に恥ぢて出で罷

る。凡夫の肉眼には是れ油の色なり。聖人の明眼には見に矢の血を視る。日本国にして是れ化身の聖なり。身を隠せる聖なり。

行基大徳子を携ける女人を過去の怨と視て淵に投てし
め異しき表を示す縁 第三十

行基大徳、難波の江を堀開かして船津を造り、法を説き人を化へたまふ。道俗貴賤集會りて法を聞く。爾の時に河内国若江郡川派里に、一の女人有子^こを携きて参り行き、法会にして法を聞く。其の子哭き謹めて法を聞かしめず。其の児年十余歳に至りて其の脚步まず。哭き謹めて乳を飲み、物を噉ふこと間無し。大徳告げて曰はく「咄、彼の嬢人、其の汝が子を持ち出でて淵に捨てよ」とのたまふ。衆人聞きて、当頭きて曰はく「慈有る聖人、何の因縁を以ちてか是の告有る」といふ。嬢子を慈ふるに依りて、棄てずしてなほ抱き、持ちて法を説きたまふを聞く。明日にまた来る。子を携きて法を聞く。子なほ露しく哭き、聴く衆に障へられて法を聞くこと得ず。大徳嘖めて言はく「其の子を淵に投てよ」とのたまふ。爾の母怪ぶれども思ひ忍ぶること得

器である可能性もある。元未詳。三国仏法伝通縁起・上には、大安寺真言院の傍に涅槃堂を弘め、「常修多羅宗」と号した、とある(攷証)。「常修多羅宗」は、弘福寺にも存した(田村園澄)。
三 大安寺の常修多羅宗。
三 國爾雅注云、國音域、門限也、兼名苑云、闕一名闕音本反、之岐美、俗云度之岐美(和名抄)。門の内外を区分する横木。「しきみ」が「しきみ」の語源、箋注倭名類聚抄。錢の置かれる場所が門橋所、「庭中」、「闕前」と、しだいに女人に近づいてきている。
三 阿梨跋摩の成実論・鳩摩羅什訳を所依として研究する学衆が成実宗(成実宗と呼ばれた。元興寺、東大寺にも存した(田村園澄)。大安寺伽藍縁起并流記資財帳には費用が計上されていない。別三論衆錢三百八十八貫五百六十四文をこれに擬するのは松浦貞俊の説。最初に大修多羅供錢、次に常修多羅供錢、最後に成実論宗分錢、と展開するが、その意味するところは不明。
三 大安寺の成実論宗。

一 諸經論を研究する学衆が「宗」として各寺に存した。大安寺にも、俱舍宗、三論宗、成実宗、法相宗、華嚴宗、律宗、の六宗が存したのである。ただし、大安寺伽藍縁起并流記資財帳には、三論衆、律衆、撰論衆、別三論衆、修多羅衆がみえ、本書によつて、修多羅宗、大修多羅宗、常修多羅宗、成実論宗の存在を知ることが出来る。二 宗(研究者集団)の長。たとえば東大寺では大學頭、小学頭、などという役があつた。三 寺に納めずに逆。四 ある結果をもたらしただけとなる縁。錢四貫を原資として富を増大させた。このような「増上縁」の語を用いるのは、仏典語の転用といえよう。

第二十九縁 三宝絵・法三に引用。今昔物語集十七ノ三十六に書承。

天眼通。もの現在のかたちを見る能力。表面化されていないものをも見とおす力。仏菩薩のもつ力のひとつ。行基を菩薩としてとらえている。「故」と表現されるのはあざらしい。六 行基の登場する説話で、女人が重要な役割をはたしているものは、本説話以外に中巻三縁、八縁、十二縁、三十縁。七 屍骨。髪に塗る油脂のひとつ。延喜式・典義寮にみえる猪膏もこれか。沢(みづ)を用いて髪に塗つたのであろう。八 奈良県高市郡明日香村大字飛鳥あたり。元興寺は本元興寺。上巻十一縁。九 血を被つてゐる。行基の眼に映じた女人の姿。猪油を髪に塗っていることをいう。二 大方広仏華嚴經・離世間品に、菩薩の有する十種ののひとつとして明眼がみえる。三 身を化してあらわれた仏菩薩。二 上巻四縁。

第三十縁 あやしき表(二)の説話。今昔物語集十七ノ三十七に書承。

行基の登場する説話で、女人が重要な役割をはたしているものは、本説話以外に中巻二縁、八縁、十一縁、二十九縁。
五 過去世における怨敵。行基にはこのようなことを知る(原文「視」能力があつた、と考えられている)のである。この力は宿命通(うきみ)とよばれ、仏菩薩のもつ力のひとつとされた。行基を菩薩としてとらえている。二 中巻七縁。三 東大阪市。この女人は船で川を下つて難波の船津の地へ向つたか(和田荻)。「八」の表記を「子」に「兄」と変化させている。本説話では多くのばあい「子」であり、二箇所のみが「兄」。